

### 3. 寄稿：芸術・建築・歴史・ランドスケープが一体となったフランスの魅力 (田中徳壽 建築家、DPLG FRANCE、元北海道東海大学芸術工学部教授)

[本稿は、篠原康明 Japa 理事による田中徳壽氏へのインタビューを取りまとめたものである]

#### —何故、フランスに留学されたのでしょうか—

京都大学工学部・大学院建築系教室の上田篤先生の研究室に在籍していた時に住んでいたところがスイス系団体の支援で設立されていた「京都国際学生の家(HDB)」でした。そこは、2/3が留学生で、1/3が日本人で、上田研究室を2年で終えた後に、外国に留学することを考えていました。

当時、米国(ハーバード大、MIT 等)への留学を希望する人がほとんどでしたが、当初から、米国への留学の興味はありませんでした。というのは、東京育ちの私が、東京以外の初めての地が京都でして、京都と云う風景が自然とヨーロッパへの窓口になったのかもしれない。そして、イギリス、フランス、イタリアの3カ国から選ぶ予定でしたが、最終的にパリの街を選びました。パリの街に大変興味があり、フランスから来ている留学生に聞いたところ、エコール・デ・ボザール(École des Beaux-Arts)と言う歴史のある美術大学があると聞き、そこに決めました。パリという街と、パリの中にある建築の大学を選んだわけです。1971年のことです。

#### —フランスの建築家資格をお持ちとのことですが、それはどのような資格でしょうか—

大学修了の単位を取得した後に、フランスの国家試験を受験する資格を得て挑戦。「フランス政府公認建築家」という資格を取得しました。この資格は芸術的観点が重視されており、我が国の一級建築士とは概念が違っており、こうした点にもフランスの芸術性を追求する姿勢を感じています。

#### —日本の街、フランスの街をどのように評価されますか—

難しい質問です。日本の田舎の街は大変美しく、特にその昔、城下町として栄えたところなどその美しさには、たぐいまれな風景があります。これは、その街の人々と行政が力を多く注いでいることにあると思われれます。

フランスの田舎の街も美しく、大小はありますが教会が街の中心にあり、そこを基点に広がり、そして、田園風景へと連なっていくというのが普通です。

フランスの田舎と日本の田舎との相違は、山と海の違いです。何しろ、フランスは、西は大西洋までほとんど山はありません。北も同様です。南は地中海まで一部山がありますが、東はドイツ、スイス、イタリアの国境近くにアルプス山脈、ジュラ山脈がある位です。

一方、日本は島国で周囲は海に囲まれており、列島の中心には山脈が連なり、山と海の間わずかな地が、街となり、都市になっています。どこから見ても山は必ず見えますし、山に登れば海が見えます。東京の中心から、山々が見えないというのは日本の中では珍しい場です。

従って、フランスの首都圏と日本の街はその在り様が大分違います。そして、日本の街は、自然の災害が風土に与えた影響が今も昔もあまり変わっていないように思えます。

一方、フランスの首都パリは、ここ 200 年~300 年の間、基本的に大きな変化はありません。オスマン(Georges-Eugène Haussmann : 政治家。1853 年から 1870 年までセーヌ県知事)が古い街のパリから、社会設備(道路、下水道等)や景観を整備して、今のパリを創りました(パリ改造)。パリは東京の山手線の内側位の広さで、500m 歩けば地下鉄の駅があると云う所です。

### —フランスが美しい街という高い評価を受けているのは何故でしょうか—



ヴァヴァン通りのアパートマン。アンリ・ソバージュ設計。1912年。上層に向かって階段状をなすスタイルは軽快で、タイルの装飾的な扱いとあわせて、アール・デコ建築のひとつの形をなしている。

少し歴史の話をしますと、フランスの建築の師は紛れもなくイタリアで、時の王侯貴族はイタリアを「素」としていました。イタリアは、ローマ時代から続く文化的な遺産が多く、ヨーロッパの中でも中心的な存在でした。

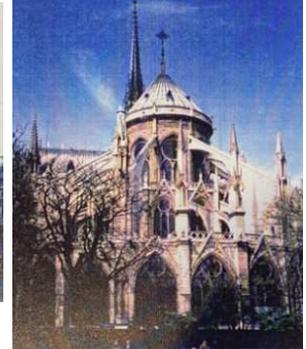
フランス王国の出現により、フランス的なものがすこしずつ出来上がっていきます。しかし、文化に国境はなく、日本からヨーロッパに行きますと、イタリア、フランス、スペイン、特にキリスト教文化圏ではその街並みはとても似ているものがあります。

そして、お尋ねのフランスの美しい街並みが評価を受けている点について、これは特に感じるがありますが、古いものをとても大事に美しく使い、それらをうまく表現していくと云うことです。修理、保存をしながら新しくしていく「温故知新」です。

一つ例を上げれば、私が大学の教員をしていた頃、学生 18 名を連れてパリに行ったことがありました。ノートルダム寺院に行った時、丁度ミサの時間で、入り口からかなり遠くで、グレゴリアン聖歌隊が歌うもとの、司祭がミサを行っておりました。1m、2m、それよりも厚い石の壁で囲まれた何十メートルもの高さの中で、ステンドグラス越しの光の空間の中で、何人かの学生が言葉なく涙を流にじませていました。建築の時空と宗教の流れに、ともにみんなと一緒にいられる喜びを感じました。

もう一つは、私が通っていた大学(ボザール)に連れて行った時でした。そこに図書館がありましたのでそこを見せに行きました。図書館といっても近代的な図書館ではなく、壁にはギリシヤの哲学者や賢人が描かれた大きな絵がいくつも飾ってあり、本は古い皮表紙のものが様々(図表の本などは 1m×2m の大きなものまで)です。机には革が貼ってあり、スタンドで灯りを取り、

天井は高い。まるで、学生はタイムスリップして、中世のヨーロッパに入ったのではないかと云うような顔つきを皆がしていました。



オペラ座正面

ノートルダム寺院 後陣 フライング・バットレス



ノートルダム寺院 内部 ろうそく



ノートルダム寺院 内部 大理石の手すり

質問の一番良い答えがここにあるように思えます。街並み、街、考え方、哲学、思想を想う時、このような図書館を現在でも残し、そして現在でも学生たちに使用させている風景があるということは、何を発信しているのか。彼ら彼女らは体の中に「深く忍ばせる」ことができる、そして、次に「移行」していく流れがここにあると云うことです。

一帰国後、北海道にも居られたそうですがどのような仕事をされていたのでしょうか。

フランスでの経験で見方が変わりましたかー

北海道東海大学旭川校舎 芸術工学部建築学科教授を拝命し、ランドスケープ LAND SCAPE(風景・景観)を担当致しました。北海道のこの地で、この分野を担当することは最もふさわしいと思ったからです。

私が北海道で一番感じたことは、やはり自然です。私は 22 歳まで東京、その後、京都で 2 年間、その後パリで 8 年、そして東京と北海道です。

芸術工学部の校舎は旭川盆地の一角にあります。旭川市内を眼下におさめ、その向こうには大雪山の連峰を望むことができます。5つの川の合流点がキャンパスの山の下で結ばれ、南の方に流れて行きます。その昔、アイヌの人達が交易と監視をする重要な場でした。すべてのキャンパスがランドスケープの教材そのものでした。学生たちには、この景観・風景の中からこの地の歴史、空気、光、風を学んでもらいたいと伝えました。そして、君たちが新たな景観の仕事をする時、その地のいろいろな要素の中に、おのずから全ての答えが秘められている、と云うことを、教室の窓の外の風景を感じながら伝えました。